



Title	大阪大学オープンサイエンスシンポジウム：オープンサイエンス時代の研究基盤と人材育成：日本における実装と展望
Author(s)	Ganguly, Raman; Gergely, Éva; 富浦, 洋一 et al.
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101962
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学オープンサイエンスシンポジウム

オープンサイエンス時代の研究基盤と人材育成 －日本における実装と展望－

2025年5月16日(金) 13:00～16:00

場所: 大阪大学図書館ホール および Web併用

大阪大学オープンサイエンスシンポジウム
オープンサイエンス時代の研究基盤と人材育成－日本における実装と展望－

2025年5月16日(金) 13:00～16:00
場所:図書館ホール および Web併用

大阪大学オープンサイエンスシンポジウム について

司会・モデレータ:甲斐尚人
大阪大学 D3センター／附属図書館／オープンサイエンス推進室



大阪大学「ワニ博士」

オープンサイエンス推進室について

◆ 室体制

研究推進本部オープンサイエンス推進室

- オープンサイエンス推進
 - 各実施項目の進捗管理

教員:7名、職員:3名

室長	研究担当理事
副室長	D3センター 招へい教授
室員	① D3センター 甲斐 ② D3センター 村田教授 ③ D3センター 春本教授 ④ 経営企画オフィス 江村教授 ⑤ コアファシリティ機構 古谷教授 ⑥ 研究推進部長 ⑦ 情報推進部長 ⑧ 附属図書館事務部長
オブザーバー	・社会技術共創研究センター長・岸本教授 ・共創機構 正城教授
事務担当	研究推進部研究企画課

◆大阪大学研究データポリシー、解説 (2023年3月総長裁定)

<p>大阪大学研究データポリシー</p> <p>令和5年3月24日 総長裁定</p> <p>大阪大学（以下「本学」という）は、健康堂、通塾等で自由に団結の精神で、人間そのものや人間が構成する種々な社会、及びそれを尊ぶ環境や自然のあらゆる分野について、研究活動の正統性をもつてみるなら研究データそのものの価値を高めるために、確実にする場合、学内研究活動倫理その他の規範を遵守した上で、当該研究者が判断する適切な方法により、研究データを収集・収納し、保管しておけばならない。</p> <p>3. 研究データの管理</p> <p>研究者は、研究活動において、研究データが適切に収集する分野別型の研究を進める貴重な知識を得るという認識のもと、可能な限り当該データを公表し、その利活用の促進に努めることを前提としてして、開示する場合、学内規則、研究活動倫理の範囲や既述大学内で定められる研究データの公開・利活用に関する方針を遵守しなければならない。また、公表にあたっては、利活用を促進するため研究データの品質の確保に努めなければならない。</p> <p>4. 大学の責務</p> <p>本学は、研究データを支撑する環境の整備を進める。</p> <p>1. 本ポリシー実現の目的</p> <p>本学の研究活動に参する研究者の主体的な研究活動を最大限に尊重した上で、本学の研究活動における研究データの収集に関する基本方針を定め、もって本学の基本理念の実現に寄与することを目的とする。</p> <p>2. 実現</p> <p>2. 1 研究者</p> <p>本ポリシーにおける「研究者」とは、本学における研究活動に従事する全ての教職員、学生等である。</p> <p>2. 2 研究データ</p> <p>本ポリシーにおける「研究データ」とは、本学の研究活動の過程で研究者によって取得・収集されたデータであり、またはそれに付随する添付にによって生成された情報を含む。データから漏れないと想定する。</p> <p>2. 3 研究データ管理</p> <p>本ポリシーにおける「研究データ管理」とは、研究者によるデータの取得・収集から公表、利活用までのデータライフサイクルの各段階におけるデータの管理を指す。</p> <p>3. 研究者の責務</p> <p>研究者に於ける研究データ管理計画に沿って、研究者は以下の責務を果たし、研究データ管理を行わなければならない。</p>	<p>3. 1 研究データの取得・収集、保管</p> <p>研究者は、研究活動の正統性をもつてみるなら研究データそのものの価値を高めるために、確実にする場合、学内研究活動倫理その他の規範を遵守した上で、当該研究者が判断する適切な方法により、研究データを収集・収納し、保管しておけばならない。</p> <p>3. 2 研究データの公開</p> <p>研究者は、研究活動において、研究データが適切に収集する分野別型の研究を進める貴重な知識を得るという認識のもと、可能な限り当該データを公表し、その利活用の促進に努めることを前提としてして、開示する場合、学内規則、研究活動倫理の範囲や既述大学内で定められる研究データの公開・利活用に関する方針を遵守しなければならない。また、公表にあたっては、利活用を促進するため研究データの品質の確保に努めなければならない。</p> <p>4. 大学の責務</p> <p>本学は、研究データを支撑する環境の整備を進める。</p>	<p>大阪大学 研究データポリシー 解説（案）について</p> <p>1. 本ポリシー 実現の目的</p> <p>本学の研究活動における研究者の主体的な研究活動を最大限に尊重した上で、本学の研究活動における研究データの収集に関する基本方針を定め、もって本学の基本理念の実現に寄与することを目的とする。</p> <p>【解説】</p> <p>ポリシー 実現の背景</p> <p>これまで本学研究データは研究活動に欠かせない要素であり、研究者は既に研究データ管理を行っている。その上で、各分野に適した良質の研究データ管理の環境を整えてきたのは研究者である。これらが既成化された研究活動の研究データ管理の手法が尊重されべきである。その上で、研究公表やオープンサインの観点から、研究データ管理に求められている以下の実現をとどめ、大阪大学研究データポリシーを定める。</p> <p>一 研究者と機関との協働による組織的・統一的な対応</p> <p>研究データは日々日々膨大になり、研究者や研究室単位ではなく大学全体として管理が必要になってきている。大学内の組織が断続的に協力体制を整う限り所と異なる研究データ管理の基本方針が求められる。</p> <p>二 研究公表およびオープンサインのための適切な研究データ管理の規定</p> <p>研究データは個人単位においては重要なエビデンスであり、研究のならび大学による説明責任も問われる。研究データポリシーによる研究全般のデータ管理の方法を示すことが求められている。また、オープンサインへの対応から、エビデンスデータの登録に加え、それ以外の研究データの整理上と公表用意するノーカット・シートが求められる。データの正確性から漏れざるの（オープン）と譲渡するもの（クロス）を分離して公表するオープン・アンド・クローズ戦略に基づき、新しいサインの進め方（研究データの公開・利活用を念頭に置いた研究データ管理）が求められている。</p> <p>制限文書</p> <p>・大学 ICT 推進協議会（AXIES）、大学における研究データポリシー実現のためのガイドライン（2021年7月1日発行）、https://rdm.asies.jp/media/sites/14/2021/07/utdp-guideine.pdf, p.4.</p>
--	--	---

◆文科省事業

- AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業

https://www.nii.ac.jp/creded/nii_ac_jp_creeded.html

- ・ オープンアクセス加速化事業
https://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/detail/1421775_00008.htm

本シンポジウムの趣旨

研究データ管理とオープンサイエンス推進には

「技術的なデータ基盤」「その利用を支援する人材」の両輪が不可欠

★ 研究環境の変化、研究者・大学の責務

研究データポリシー、オープンアクセスポリシーに沿った研究の推進

主要な研究助成である科研費制度の変化：

- DMP作成の必須化
- 即時オープンアクセスの義務化

★ 本学の取組み

附属図書館・研究推進部・D3センターが連携：

- データ集約基盤ONIONやデータ公開基盤OUKAの基盤整備
- 教材・教育プログラム開発による人材育成
- 国内外機関との連携も推進

日本と欧州の先進事例を通じて

国内外の事例と知見を共有、研究者・支援者・技術者・教育担当者の連携を促進

→システム設計と支援人材像を議論と交流の場に

登壇者紹介



Raman Ganguly
先生(ウィーン大学)

ソフトウェア設計・開発部門の責任者。研究支援基盤PHайдраの運用に長年従事。Data Steward コース講師としても活躍し、欧州の持続可能な研究データ基盤とそのコスト構造に精通。



Éva Gergely
先生(ウィーン大学)

ITプロジェクトマネージャー。研究データ管理に関する国内協働プロジェクトのマネジメント等に従事。Data Steward コース講師としても活躍。「PHайдра」の開発およびユーザー要件の調整も担当。



富浦洋一先生
(九州大学)

システム情報科学研究院教授。研究データ管理支援部門長として、研究支援とストレージを統合したQRDMシステムの構築・運用に尽力。研究データ管理の中核を担い、支援体制全体の設計にも従事。



伊達進先生
(大阪大学)

D3センター教授。研究データ集約基盤ONIONの構築・運用を主導し、研究支援体制の整備にも日常的に関与。全学展開を見据えた中核的取組みに従事。



吉賀夏子先生
(大阪大学)

人文学研究科准教授。人文社会科学における研究支援とデジタル技術の橋渡しを担い、デジタル・ヒューマニティーズの教育実践や教材開発を先導。

パネルディスカッション:「未来を拓く研究データ基盤と支援人材像」

①研究データ基盤を「作る」だけでなく、「実際に使われる仕組み」として機能させていくにはどのような工夫や仕掛けが重要？

★ Raman Ganguly 先生(ウィーン大学)

PHAIDRAなどのシステムの、持続可能性を保つ上で最も重視されている設計思想や運用体制とは何か？

→【持続可能性 × 人材】の視点

技術的な基盤を継続的に支える人材育成についての取り組み(専門性の継承やスキル維持の面など)

→【人材確保の課題 × 組織設計】の視点

業務の属人化を防ぎながらチームとして基盤を支えるうえで、役割分担やスキル共有の工夫

パネルディスカッション:「未来を拓く研究データ基盤と支援人材像」

①研究データ基盤を「作る」だけでなく、「実際に使われる仕組み」として機能させていくにはどのような工夫や仕掛けが重要？

★ 吉賀夏子 先生(大阪大学)

「研究文化」、「教育的仕掛け」はどのようなものが必要か

→ そうした変化に伴う支援や教育の在り方など、特に重要な支援の形など

★ 富浦洋一 先生(九州大学)

QRDMの基盤設計上で特に苦労された点

→人的体制や学内調整の難しさ、運用面の定着に向けた工夫など

★ 伊達 進 先生(大阪大学)

ONIONの学内の多様なニーズを収集しながらの設計、特に設計に反映された現場の声など

→技術的な面と、運用組織や役割の設計など

パネルディスカッション:「未来を拓く研究データ基盤と支援人材像」

②AIや自動化の進展により、研究データの管理や支援のあり方にも変化が求められる時代に。データ基盤の設計や支援人材の役割は、今後どのように変わるべきか？

Raman Ganguly 先生(ウィーン大学)

富浦洋一 先生(九州大学)

伊達 進 先生(大阪大学)

吉賀夏子 先生(大阪大学)